

# 高麗時代の遺跡から出土する 中国陶磁器の状況と特徴

## 韓国出土品を中心として

The Conditions and Characteristics of Chinese Ceramics Excavated from Sites of the Goryeo Dynasty: A Study Focused on Archaeological Findings from South Korea

李明玉<sup>(1)</sup>

荒木和憲 [訳]

LEE Myoung ok Translated: ARAKI Kazunori

### ①序文

### ②高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器の状況

### ③出土中国陶磁器の特徴と性格

### ④結論

### 【論文要旨】

高麗は初期から中期まで宋・遼・金との持続的な交流があり、後期には元と交流した。こうした状況によって、その時々中国の多くの文物が高麗に流入し、とりわけ相当量の中国陶磁器が高麗の全域で消費される傾向がみられる。中国陶磁器は高麗の全時期のなかでも、とくに高麗中期の遺跡から出土する。出土の地域と遺跡の性格を探ると、京畿道・忠清道・全羅道・慶尚道・済州地域で確認されており、宮城・官庁関連遺跡・寺刹（寺址）・建物址・墳墓、全羅・忠清地域の海底などである。器種別の出土の様相を探ると、青磁は越州窯産・龍泉窯産が確認されており、五代末～北宋代の越州窯産から、北宋～元代と編年されるものまで及ぶが、宋代のものが大部分である。白磁は北宋・南宋代の定窯産・景德鎮窯産が最も多く、このほか磁州窯産や福建・広東の窯の製品が少量確認される。とりわけ高麗中期には12～13世紀代の景德鎮窯産青白磁の出土量が多く、発見地域も広範囲にわたる。黒釉は福建の建窯・建窯系・吉州窯・磁州窯産のものが確認されており、そのほか磁窰窯・鈞窯産のものもある。高麗時代の陸上遺跡（韓半島本土の遺跡）から出土する中国陶磁器の特徴をいくつか整理すると、以下のとおりである。

第一に、中国陶磁器の流入は高麗中期に集中し、なかでも青磁が非常に少なく、中国陶磁器の大部分を占めるのは白磁である。福建・広東地域産のやや質が劣る白磁類が少量あり、比較的品質が良い定窯産・景德鎮窯産白磁が主として消費されたことがわかる。当時、高麗の内部で白磁に対する消費欲求が高かったことと比較して、質的に優れた白磁の製作が困難な環境であった。このため、主に高麗白磁の代替品として消費されたものであり、上流層が富や実力を誇示するための手段と認識して専有・使用したものとみられる。

第二に、中国青磁は一部の地域では少し確認される程度であるが、当時の高麗は象嵌青磁をはじめとして、質的に優れた青磁を製作しており、相当量の高麗青磁が中国に輸入されたことは、寧波・杭州などの最近の出土事例によっても知ることができる。したがって、高麗の窯業の状況を反映して、青磁の需要が白磁よりも低かったと考えられる。

第三に、済州島では中国陶磁器は寺刹・官衙址・城郭・祭祀遺跡・生活遺跡などで出土しており、龍泉窯青磁が最も多く、次いで景德鎮窯青白磁が多い。このほかにも越州窯青磁、定窯白磁、福建同安窯青白磁、江蘇宜興窯と河北磁州窯の褐釉瓶なども発見された。済州島では、高麗の陸上遺跡で発見される頻度が非常に低い福建産白磁、江蘇または河北の褐釉磁器、浙江龍泉窯青磁がいくつかの遺跡で大量に発見されており、同時期の陸上遺跡における中国陶磁器の出土の様相とは、やや異なる傾向をみせることがわかる。これは済州島が中日海上交通における中継拠点としての役割を果たしたためであるとの見解もあるが、今後、もう少し綿密な分析と研究が必要であろう。

第四に、泰安馬島海域と新安黒山島海域では、韓国の陸上遺跡からは出土事例がほとんどない中国陶磁器が発見された。これらの海域で中国陶磁器が発見されたのは、当時の宋・日本間の貿易ルート上に位置するためだとみるべきなのか、宋・高麗間の貿易ルート上に位置するためだとみるべきなのかは、いくつかの見解がある。筆者は、韓国の陸上遺跡で中国南方産の陶磁器が部分的に出土するという様相にもとづき、宋・高麗間の貿易過程で沈水したものが発見されたものと考えたい。ただし、今後、より詳細な研究によって明らかになることを期待したい。

【キーワード】高麗時代、中国陶磁、交流、景德鎮窯、定窯

## ①……………序文

高麗時代には中国との緊密な交流を通して、当時の中国の文物が高麗に流入し、高麗の文化に多大な影響を与えた。高麗初期から中期まで宋・遼・金と持続的な交流があり、後期には元と交流した。中国との交流を通して多様な文物が流入したけれども、特に中国陶磁器の相当量が高麗に流入して全国的に消費され、高麗時代の陶磁の製作と発展にも多大な影響を与えた。このような中国陶磁器は高麗の全時期のなかでも、特に高麗中期に集中しており、当時の活発な交流の様相を推察することができる。中国陶磁器は江原道・京畿道・忠清道・全羅道・慶尚道・済州地域の宮闕・官庁の関連遺跡、寺刹（寺址）、建物址、墳墓、全羅・忠清地域の海底など、全国的に出土しており、中国南方・北方のさまざまな窯で製作されたものである。

高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器については、これまで多くの研究がなされてきた。中国陶磁器の生産地・種類・製作時期を明らかにして、それが高麗陶磁器に及ぼした影響を論じる研究や、中国陶磁器の種類別の消費傾向の特徴などを明らかにする研究が蓄積されている。また、高麗は中国との交流を通して陶磁器を生産しはじめ、全期間にわたって中国陶磁器の影響を受けて発展した。このような高麗陶磁器は日本でも全国的に出土するなど、幅広く流通して消費された。

本論文では、これまでに韓国で蓄積された研究成果を中心として、高麗時代に流入した中国陶磁器の生産地・種類・製作時期などの出土状況を探り、特徴を整理して、今後の研究課題について簡単に整理する。ただし、現在の行政区域上、北韓に属する資料は報告資料の限界があるため、韓国出土品を中心として分析することとし、北韓の資料の一部については、報告書・論文に掲載されたものを参照して整理した。

## ②……………高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器の状況

高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器は、青磁・白磁・黒褐釉・黄釉などで、越州窯・耀州窯・定窯・景德鎮窯・磁州窯・磁竈窯・龍泉窯・建窯、福建および広東などの窯で生産された製品である（図1・2）。

### 1. 青磁

越州窯・耀州窯・龍泉窯で生産された磁器で、龍泉窯はごく少量である。

#### 1) 越州窯

越州窯は浙江省で青磁を生産した窯で、早くも唐代に全世界的に輸出されたほど、優れた磁器としてよく知られている<sup>(4)</sup>。越州窯青磁は、韓国では統一新羅時代に大量に輸入され、当時の首都であった慶州のほかにも、全国各地の遺跡で出土する傾向をみせる<sup>(5)</sup>。高麗時代の遺跡では、おおよそ五代末期から北宋代に製作された注子（水注）・盆（合子）・唾壺などが開城一帯で出土した<sup>(6)</sup>。釉色は緑色・黄色・青色など、少しずつ差異がある。出土品のなかで「青磁陽刻蓮弁文唾壺」（図3-1）は、五代末～北宋初、または北宋代に製作されたものと推定され、開城の高麗時代の古墳から出土した



図1 中国陶磁器が出土した高麗時代遺跡の分布図

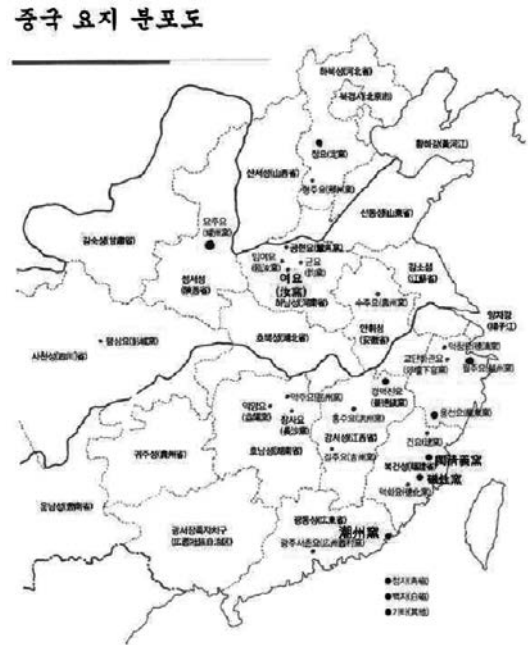


図2 中国窯址分布図<sup>(3)</sup>



1. 青磁陽刻蓮弁文唾壺  
(徳寿 3353, 国立中央博物館所蔵)
2. 青磁陽刻蓮弁文盒  
(徳寿 4817, 国立中央博物館所蔵)
3. 青磁画花人物文注子  
(徳寿 2072, 国立中央博物館所蔵)

図3 越窯青磁, 高麗開城, 五代末~北宋

ものと伝えられる。広い縁をなす部分に陰刻で蓮華唐草文が装飾され、体部の外面に陽刻で蓮弁を施文したものであるが、底部に「大」という銘がある。この遺物は、939年(天福4年)と編年される馬氏王后の康陵で出土した唾壺、京畿道始興の芳山洞青磁窯址出土品との類似性が指摘されたことがある。統一新羅時代の首都であった慶州地域の場合、8世紀後半~9世紀初期から流入する傾向をみせるが、10世紀半ばごろに越州窯青磁の流入が中断する。高麗の成立と軌を一にし、10世紀頃と編年される越州窯青磁は、約16点程度と推定される。<sup>(8)</sup>

## 2) 耀州窯

大部分は北宋代に製作されたものである。開城一帯、京畿道坡州の恵蔭院址、安城の奉業寺址、驪州の元香寺址、忠清道保寧の聖住寺址、全羅北道益山の弥勒寺址、慶尚南道釜山のマンミ洞遺跡

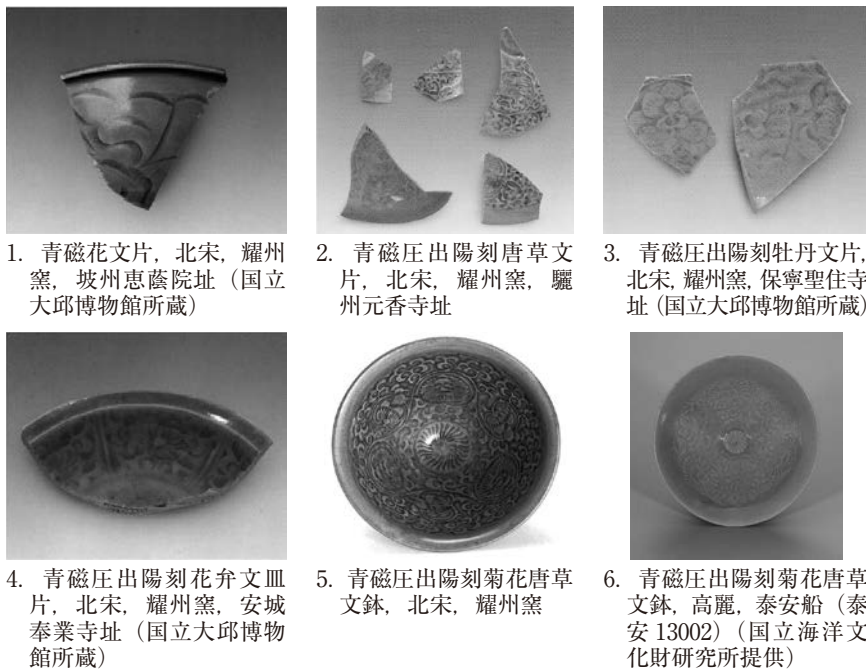


図4 高麗時代の遺跡から出土する耀州窯青磁

(耀州窯系), 慶尚北道慶州の新羅王京遺跡などがある<sup>(9)</sup>。器種は鉢・碗・皿・小壺などで, おおよそ日常使用の碗・皿が主体であるが, 皿のなかでは, 内面を一定の間隔で区画して花文を装飾したものもある (図4-4)。耀州窯は圧出陽刻 (印花) で多様な模様を装飾するのが特徴である。模様としては, 菊花唐草文・蓮池鴨文・牡丹折枝文・詩文・怪石虎雀文などがあり, そのなかでも菊花唐草文・牡丹文などが主に使用された。製作時期はおおよそ北宋代と考えられる。高麗中期の康津・龍雲里10号 (Ⅱ層) 窯址, 12世紀前半～半ばごろと推定される泰安沈船 (泰安大島) では, 耀州窯産品と類似する圧出陽刻 (印花) 技法の菊花文・牡丹文などが装飾された花形皿・鉢 (図4-5) などが出土し, 耀州窯青磁が高麗青磁の製作にも影響を及ぼしたことがわかる<sup>(10)</sup>。

### 3) 龍泉窯

龍泉窯は北宋代から明代まで操業し, 主に青磁を生産する浙江省内最大の窯址群を形成したところである。龍泉窯は特に元代に入って, 海外諸国へ磁器を輸出しはじめたのであるが, その産品は東アジア・東南アジア・西アジア・中東・アフリカ帯などの各地で発見されている。

しかし, 龍泉窯青磁は高麗時代の遺跡で発見される事例が非常に稀である。出土地としては, 開城一帯, 京畿道南楊州の水鍾寺, 忠清南道牙山の温陽洞, (伝) 慶尚北道尚州, 済州の水精寺址・法華寺址・牧官衙址・缸坡頭里城などがあり, これ以外の地域としては, 全羅南道靈光の小角氏島, 忠清南道保寧の挿矢島・仏母島海底, 済州の新倉里などの海底で発見されることもある。海底を除けば, 済州地域に比較的多くが集中して出土していることがわかる。このような龍泉窯磁器は, おおよそ南宋～元代に製作された鉢・皿・瓶・硯滴などがある。遺跡から出土した青磁鉢は, 外面を陽刻蓮弁文で装飾したり, 内底面の中央に円文を刻み, そのなかに牡丹文を装飾するなど, 龍泉窯で確認される典型的な模様の素材と装飾技法が確認される。伝慶尚北道尚州出土の「青磁陰刻花文

鉢」は、底部から器側面が緩やかなカーブをなす形態で、内面には陰刻で蓮華文が施文されるが、器壁が薄く透明であり、黄味を帯びる。日本の九州の博多遺跡（42次調査）でも出土し、南宋代のものと推定される<sup>(11)</sup>。

また、京畿道南楊州の水鍾寺の舍利塔から出土した龍泉窯青磁としては、舍利荘嚴具



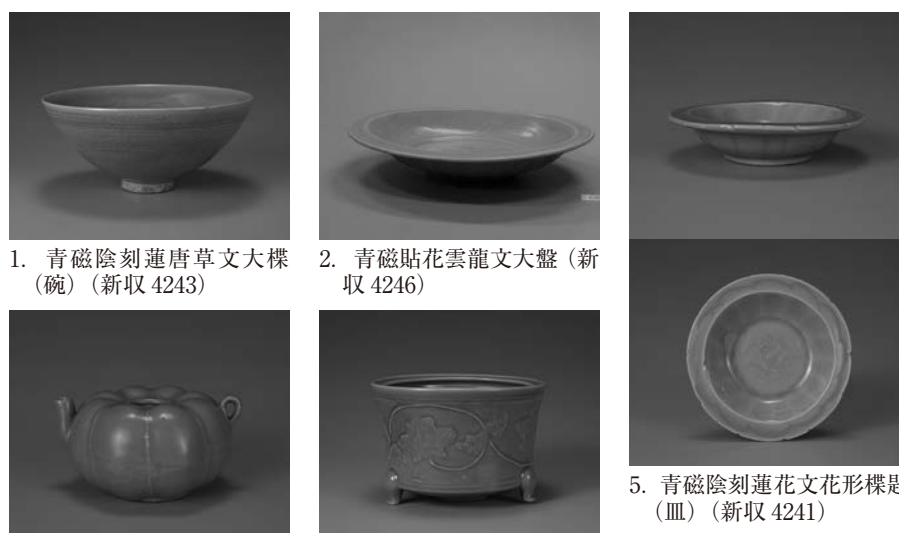
1. 舍利荘嚴具一括、京畿南陽州水鍾寺僧塔（国立大邱博物館所蔵）
2. 青磁 鎬文壺（新安 14872、国立中央博物館所蔵）（出典：国立海洋遺物展示館『新安船と東アジア陶磁交易』）

図5 高麗時代の遺跡と新安船から発見された青磁有蓋壺

のひとつである「青磁鎬文有蓋壺」がある（図5-1）。龍泉窯で製作された典型的な器種で、身は縦に鎬文を施し、首は口縁まで直立する形態で、荷葉形の蓋がある。このような有蓋壺は、内蒙古集寧路窖藏遺跡と新安船出土品（図5-2）などによって時期を知ることができる。身は元代の製作であるが、蓋は龍泉大窯楓洞岩窯址の明代の層位からの出土品と形態上一致しており、明代に編年することができる<sup>(13)</sup>。

忠清南道牙山の温陽洞では多数の元代龍泉窯青磁が出土したのであるが、新安船の龍泉窯青磁とは、器種と様式的特徴がほとんど一致する。発見された龍泉窯青磁は計8点で、青磁陰刻蓮唐草文大椀（碗）、青磁貼花雲龍文大盤、青磁陰刻蓮花文花形碟匙（皿）、青磁陰刻菊花文碟匙、青磁陰刻蓮花文碟匙、青磁陰刻唐草文碟匙、青磁瓜形小注子（水注）、青磁貼花牡丹唐草文香炉である（図6）。

このほかにも、北宋末期の初期龍泉窯系と推定される青磁櫛描文鉢がある（図7-1）。仁川中山洞遺跡<sup>(15)</sup>で出土したものであるが、鉢の外面には陰刻で櫛描文を施文し、内面には櫛描文と花文を陰



1. 青磁陰刻蓮唐草文大椀（碗）（新収 4243）
2. 青磁貼花雲龍文大盤（新収 4246）
3. 青磁瓜形小注子（新収 4245）
4. 青磁貼花牡丹唐草文香炉（新収 4240）
5. 青磁陰刻蓮花文花形碟匙（皿）（新収 4241）

図6 忠清南道牙山温陽洞出土の龍泉窯青磁（国立中央博物館所蔵）



1. 青磁櫛描文鉢，初期龍泉窯系，仁川中山洞遺跡（中央文化財研究院提供）



3. 青磁硯滴，元，靈光小角氏島海底（光州36，国立大邱博物館所蔵）



4. 青磁陰刻花文鉢，南宋，伝・慶北尚州出土（筆者撮影，尚州博物館所蔵）



2. 青磁皿，元，保寧挿矢島・仏母島海底（国立大邱博物館所蔵）



5. 青磁蓮弁文鉢，元，開城出土（徳寿5052，国立中央博物館所蔵）

図7 高麗時代の遺跡から出土する龍泉窯青磁

刻で装飾する。このような模様が装飾された青磁鉢は、福建省同安窯青磁または同安窯系統の青磁大椀と類似し、龍泉窯系青磁とも類似した特徴をみせる。龍泉窯系青磁のなかで龍泉大白岸金鐘湾窯址の外面に竹の櫛でつけたような線文、内面の櫛描文・点文などを組み合わせた形態など、初期龍泉窯系青磁により類似するものと考えられる。

一方、高麗青磁のなかにも見える高足杯・片口鉢・大盤・鎬形壺などの器型は、元代の景德鎮窯と龍泉窯で確認され、双魚文と突帯文（蓋の外面に横の帯が回りながら貼り付けられた形態）は、やはり龍泉窯で確認される模様の素材と表現方式である<sup>(16)</sup>。したがって、龍泉窯青磁が高麗時代の遺跡で発見される事例は少ないが、高麗青磁の造形にも多くの影響を与えたものとみられ、交流などをおとした龍泉窯青磁の影響を知ることができる。

## 2. 白磁

中国陶磁器のなかで、白磁はおおよそ北方の定窯・磁州窯や、南方の景德鎮窯などで製作されたものと推定され、定窯と景德鎮窯産がもっとも多い<sup>(17)</sup>。これ以外にも、福建省閩清義窯（推定）、広東省潮州窯で製作されたものとみられる、南方系の窯場の系統に属する白磁もある。

### 1) 定窯・景德鎮窯

高麗時代に輸入された中国白磁のなかでもっとも多い数量を占め、全国的に広い分布範囲をみせる。開城・江原道・京畿道・忠清道・全羅道・慶尚道などの寺址・古墳・城郭・住居遺跡で発見され、北宋～元代に製作されたものである。器種はおおよそ鉢・碗・皿の日常生活用品が主体をなすが、開城一帯で発見される白磁は、注子（水注）・壺・香炉など、器種がより多様であり、北宋代のものともみられる。開城の満月台と開城一帯の古墳、江原道原州の居頓寺址・法天寺跡、寧越の興寧禪院、三陟の三和里古墳、安山大阜島の六谷古墳群、京畿道安城の奉業寺址、北漢山の三千寺址、

龍仁の麻北里寺址・龍仁市古墳（龍仁新葛－水枝高速道路建設工事区間）、坡州の恵蔭院址、驪州の元香寺址、華城の花山洞遺跡、仁川江華の玉林里遺跡（江華中城）・新鳳里遺跡・長井里遺跡、丹陽の玄谷里古墳、扶餘の王興寺址、益山の弥勒寺址、羅州の松月洞遺跡、慶州の仏国寺境内遺跡などにおいて、定窯・景德鎮窯の白磁が出土している（図8）。

北宋代の白磁のなかでも口縁を輪花に切り抜き、そこから内面の側斜面まで縦に線を引いた花形皿は、開城一帯のほかにも、さまざまところで確認される器種であり、比較的によく全国に流通したものとみられ、寺刹・住居址・官庁の関連遺跡で出土した（図9）。これ以外にも、底が高くて器側面がカーブして広がる白磁は、高麗時代のさまざまな遺跡で多数発見されている。

分布地域をみると、北宋代の白磁のなかでも、特に開城一帯の墳墓から出土したものと伝えられる景德鎮窯系統の青白磁は、注子（水注）・瓶・碗・皿・蓋托・盆（合子）・枕・香炉など、定窯白磁に比べて器種が多様で品質も優れている（図10）。このような青白磁類は、開城一帯の王室や高位官僚階層において使用された可能性が高いとみられる。<sup>(18)</sup>

墳墓の出土品のなかでは、墓主が知られている開城の文公裕墓出土品を代表的な例として挙げることできる（図11）。文公裕（1088～1159）は、1115年に宋へ使臣として派遣され、1129年と1150年には金への使臣として往来した、従一品判三司事を経歴した高位官僚である。墓からは高麗青磁とともに定窯白磁碗、景德鎮窯と推定される鳳首瓶・注子（水注）が発見されたのだが、これらの白磁は、遼代の河北省宣化遼張世卿（1042～1116）墓、および景德鎮湖田窯址の北宋代の層位から出土した青白磁小注子（水注）と類似し、おおよそ北宋代の景德鎮窯で製作されたものとみられる。<sup>(19)</sup>

金代（1115～1234）のものとして知られる定窯白磁は、高麗の宮廷があった開城一帯で大部分が発見されている。<sup>(20)</sup> 出土した器種は、鉢・皿・有蓋蓋<sup>(21)</sup>があり、白磁陰刻波魚文鉢・白磁陽刻蓮華唐草



1. 白磁碗、景德鎮窯、益山弥勒寺址（国立大邱博物館所蔵）



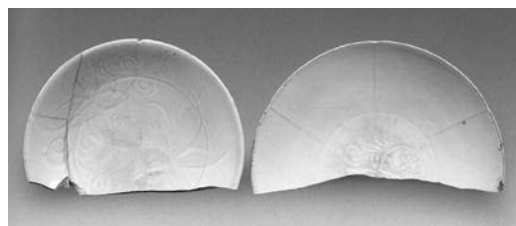
2. 白磁碗、定窯、南原実相寺址（筆者撮影、国立扶餘文化財研究所所蔵）



3. 青白磁碗、景德鎮窯、慶州新羅王京遺跡（筆者撮影、国立慶州文化財研究所所蔵）



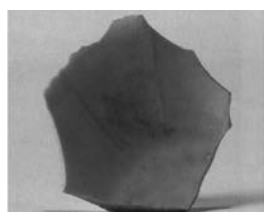
4. 白磁陰刻蓮弁文碗、潮州窯（推定）、安城奉業寺址（国立大邱博物館所蔵）



5. 白磁陰刻花文皿、定窯、益山弥勒寺址（国立大邱博物館所蔵）

図8 高麗時代の遺跡から出土した中国白磁碗・皿（定窯・景德鎮窯など）

文鉢などと同じく、器物の内面に模様を埋め尽くすように刻んだり、型で押して装飾したものである（図12）。



1. 青白磁花形皿片，景德鎮窯，驪州元香寺址



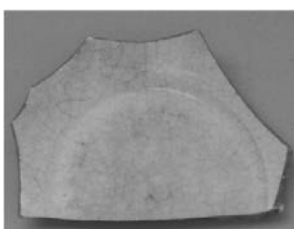
2. 白磁花形皿片，定窯，保寧聖住寺址（国立大邱博物館所蔵）



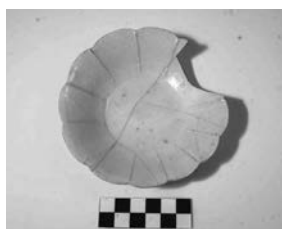
3. 青白磁花形皿片，景德鎮窯，南原実相寺址



4. 白磁花形皿，定窯，扶餘王興寺址（国立大邱博物館所蔵）



5. 青白磁花形皿片，原州法泉寺址



6. 青白磁花形皿，定窯，慶州仏国寺境内遺跡（慶州大学校博物館『慶州仏国寺境内聖宝博物館建立予定敷地発掘調査報告書』）

図9 高麗時代の遺跡から出土した白磁花形皿（北宋，定窯・景德鎮窯）



1. 青白磁注子・注碗，注子：高さ17cm，注碗：高さ11.4cm（徳寿2572，国立中央博物館所蔵）



2. 青白磁注子，高さ16.3cm，口縁径5.5cm（徳寿992，国立中央博物館所蔵）



3. 青白磁花形皿，高さ12.2cm，口縁径10.6cm（徳寿3725，国立中央博物館所蔵）



4. 青白磁花形皿，高さ12.2cm，口縁径10.6cm，底部径7.6cm（徳寿5385，国立中央博物館所蔵）



5. 青白磁盞托，高さ4.9cm，径13.9cm（徳寿678，国立中央博物館所蔵）



6. 青白磁注子，高さ16.6cm，底部径6.7cm（徳寿683，国立中央博物館所蔵）

図10 開城一帯から出土した青白磁（北宋）





図 11 開城・文公裕 (1088 ~ 1159) 墓から出土した中国白磁・高麗青磁 (国立中央博物館所蔵)



1. 白磁陰刻波魚文鉢, 定窯, 開城出土 (徳寿 4952, 国立中央博物館所蔵) 2. 白磁陽刻蓮華牡丹文鉢, 定窯, 開城 (徳寿 1177, 国立中央博物館所蔵) 3. 白磁陽刻蓮弁文有蓋筒形蓋, 定窯, 開城出土 (徳寿 3616, 国立中央博物館所蔵)

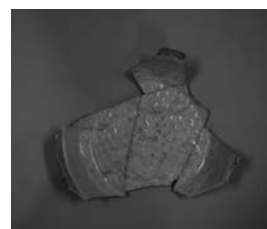
図 12 高麗時代の遺跡から出土した金代白磁 (開城出土, 定窯)



1. 原州法泉寺址 (国立大邱博物館所蔵)



2. 龍仁麻北里寺址 (国立大邱博物館所蔵)



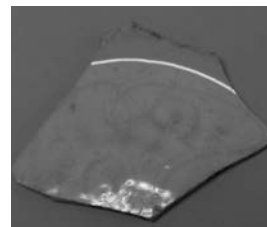
3. 益山弥勒寺址 (筆者撮影)



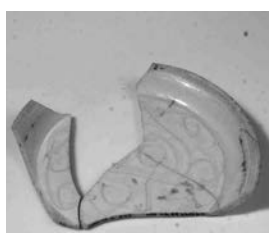
4. 東海市 (三陟) 三和洞古墳 (国立春川博物館所蔵)



5. 坡州恵蔭院址



6. 南原実相寺址 (筆者撮影, 国立扶餘文化財研究所所蔵)



7. 慶州仏国寺境内遺跡 (慶州大学校博物館『慶州仏国寺境内聖宝博物館建立予定敷地発掘調査報告書』)

図 13 国内遺跡出土の南宋～元代青白磁

南宋および元代 (12 世紀後半～13 世紀) に製作された白磁は, 青白磁鉢・青白磁皿・青白磁花形碗などである (図 13)。詳細に探ると, 器物の内面に 2 名の童子が花唐草の茎をつかんで遊ぶ模



1. 青白磁花形碗，羅州松月洞遺跡（筆者撮影，木浦大学校博物館所蔵）  
2. 青白磁花形碗，広東南海1号沈没船，南宋（中国国家博物館所蔵）

図14 羅州松月洞遺跡および南海1号沈没船から出土した南宋代の青白磁花形碗

様が陰刻された青白磁童子花唐草文鉢，平底に伏焼法で製作され，口縁の釉薬を削り取り，内面には陰刻や陽刻で埋め尽くすように牡丹文と蓮池魚文を装飾した折腰形青白磁皿が多い。このような白磁は，おおよそ景德鎮窯で製作されたものと推定される。このほか，窯場を知ることができないが，南宋～元初にあらわれる器型とみられる。

また，羅州の松月洞遺跡で出土した青白磁花形碗は，造形と装飾技法によって，中国南宋代と考えられている広東省南海1号沈没船から出土した青白磁花形碗と同じものであることがわかる（図14）。このような白磁は，おおよそ中国景德鎮窯と周辺の窯場で大量生産された輸出用陶磁とみられ，江原道・開城・京畿道・全羅道・慶尚道・済州などの高麗宮城址をはじめ，全国の寺刹と官庁の関連遺跡，墳墓で発見される。

## 2) その他の南方系の窯場

定窯・景德鎮窯系統を除き，福建または広東産と推定される白磁があるが，数量は少ないほうである。江原道三陟の三和里古墳，京畿道坡州の恵蔭院址，安城の奉業寺址，大田の加午洞古墳，丹陽の玄谷里古墳，全羅北道益山の弥勒寺址，南原の実相寺址などで出土した。数量は少なく，福建閩清義窯産または広東潮州窯産と推定され，製作時期は北宋末期～南宋と考えられる。三陟の三和里古墳では，定窯と定窯系白磁2点，景德鎮窯と景德鎮窯系青白磁2点，福建閩清義窯産白磁盤5点などが出土した。<sup>(22)</sup>安城の奉業寺址，益山の弥勒寺址，南原の実相寺址で出土した碗は，口縁がやや外反し，外面全体に深く線刻して蓮弁文を表現したものとみられる。このような形態は，広東省潮州の筆架山窯出土品と非常に類似する。

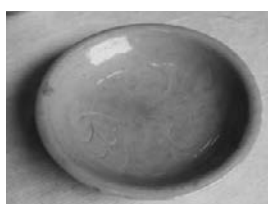
筆者が実見した益山弥勒寺址出土の白磁碗は，底を削る方式においても，広東省の窯場で生産された磁器の特徴と類似すると考えられる。忠清南道丹陽玄谷里古墳の23号石廓墓からは，福建産または広東産と考えられる白磁蓋1点が出土した。大田加午洞古墳で出土した白磁陰刻雨文碗は，やはり底部を除いて釉薬を施すことや，内面に施文された篋文，比較的粗質な状態などを考慮すると，福建産と推定することができる（図15）。

## 3. 黒釉

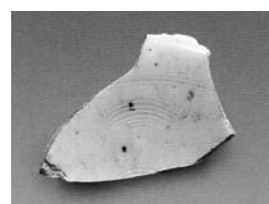
高麗時代の遺跡で発見された黒釉製品は，その大部分が碗であり，開城，安城の奉業寺址・梅山里古墳，驪州の元香寺址・高達寺址，益山の弥勒寺址，扶餘の王興寺址，南原の実相寺址，慶州の仏国寺，瑞山の大基里古墳，大田の加午洞遺跡（古墳）などで出土した。北宋～南宋代に製作され



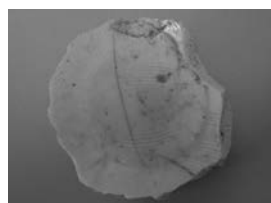
1. 白磁碗, 北宋~南宋, 福建閩清義窯(推定), 益山弥勒寺址(国立大邱博物館所蔵)



2. 白磁皿, 北宋~南宋, 福建閩清義窯(推定), 東海市(三陟)三和洞古墳(国立春川博物館所蔵, 出典:尹恩珠『宋金時期東亜出土的中国白瓷研究』)



3. 白磁陰刻雨文碗片, 扶餘王興寺址(国立大邱博物館所蔵)



4. 白磁雨文碗片, 慶州王京遺跡(筆者撮影, 国立慶州文化財研究所所蔵)



5. 白磁碗, 福建, 丹陽玄谷里古墳(出典:ソウル市立大学校博物館『高麗人の永遠なる命, 丹陽玄谷里』)



6. 白磁陰刻雨文碗, 福建閩清義窯(推定), 大田加午洞古墳



7. 白磁碗, 福建, 驪州高達寺址



8. 白磁蓮弁文碗, 広東潮州窯, 安城奉業寺址(国立大邱博物館所蔵)



9. 白磁蓮弁文碗, 広東潮州窯, 益山弥勒寺址(国立大邱博物館所蔵)

図 15 高麗時代の遺跡から出土した南方系(福建・広東)白磁(北宋~南宋)



1. 驪州高達寺址



2. 安城梅山里古墳(出典:国立海洋遺物展示館『新安船と東アジア陶磁交易』)



3. 南原実相寺址(国立扶餘文化財研究所所蔵, 同提供)



4. 開城一带(徳寿 1959, 国立中央博物館所蔵)



5. 高麗宮城(出典:開城満月台南北共同発掘デジタル記録館 www.manwoldae.org ©남북역사학자협의회)



6. 扶餘王興寺址(国立扶餘研究所所蔵, 同『王興寺-発掘中間報告I』)



7. 原州法泉寺址

図 16 高麗時代の遺跡から出土した黒釉碗

たもので、南宋代に編年されるものが多い<sup>(23)</sup> (図16)。このような黒釉碗は、底部を除いて釉薬を施し、口縁が直立したり、外反したりして、おおよそ身は黒色、口縁は褐色を帯び、胎土は黄色を帯びるものが多い。出土地が確実でない黒釉碗のなかに、黄色の胎土に底部を除いて釉薬を施し、内面には釉面の上に長寿と幸福を象徴する吉祥文字である「寿山福海」と花模様を表現したものがあるが、国内では発見事例がほとんどない。生産地は大部分が福建省建窯・建窯系であり、一部、吉州窯産・磁州窯産もある。一方、このような黒釉碗は、濟州島地域における出土事例は報告されたことがない。

#### 4. その他

磁竈窯・磁州窯・鈞窯などがあるが、磁竈窯産としては開城で出土した黄褐釉盤3点があり、磁州窯産としては開城で出土した瓶がある。鈞窯産のものは南原の実相寺址から破片で発見された。これ以外にも正確な窯場を知ることができないが、南方の窯で製作されたとみられる黄褐釉壺などが開城で出土したことがある (図17)。

また、高麗時代の遺跡で出土する磁州窯系の磁器は、宋～元代に該当し、多数確認されている。宋・金代の場合、白釉・醬釉・黒釉・緑釉・絞胎・白地黒花・白地剔花・紅緑彩などの多様な釉薬と装飾技法で製作されたものである。種類は碗・盤・瓜形小壺・盞・注子(水注)・香炉・長頸瓶・梅瓶など多様であり、装飾技法によって製作器種の差異がみられる。元代磁州窯系磁器は黒釉・白地黒花・孔雀藍釉などで、四耳瓶・梅瓶・壺などの器種が確認されている。このような磁州窯系磁器は、おおよそ開城一帯だけで出土するものとして知られており、王室・貴族などの上流層が消費した可能性が高い<sup>(25)</sup>。



1. 黄釉大盤、開城出土、福建磁竈窯、南宋～元、(徳寿 3273, 3392, 4955, 国立中央博物館所蔵)
2. 白磁黒花雲龍文瓶：皿と孔雀藍釉小壺、開城出土、元、磁州窯 (徳寿 2630, 3680, 2349, 国立中央博物館所蔵)

図17 高麗時代の遺跡から出土したその他の窯場(福建磁竈窯・磁州窯)の陶磁器

### ③……………出土中国陶磁器の特徴と性格

#### 1. 中国白磁の系統と性格

高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器は、青磁・白磁・黒釉・黄釉など多様であるが、高麗中期の遺跡に集中する。なかでも青磁は非常に少なく、中国陶磁器のなかで多数を占めるのは白磁である。このような高麗中期に流入した中国白磁は、北方の定窯・磁州窯、南方の景德鎮窯、福建省などの南方系の窯場で製作されたものであるが、定窯・景德鎮窯の白磁が主体をなし、北宋、金代、南宋～元代と時期的に区分される。輸入白磁は質的に優れたものと、比較的粗質なものとの混ざっている。

北宋代の白磁のなかで、青白磁は器種が多様であり、比較的優れた品質のものが多い。主に開城一帯で消費される傾向を見せるのだが、特に開城で出土した景德鎮窯白磁は、先述したように器種と文様が多様で、基本的には全面に釉薬を施すなど、優れた品質を示している。これに比べて、南宋代または元代に輸入された白磁類は、器種が単純になり、質が多少落ちる場合が多い。南宋～元代の青白磁は、鉢・碗・皿類で、器種が相当に制限され、特に南宋代の輸出用商品として大量生産された日常用品類であることがわかる。

このような青白磁は、13世紀頃に全国各地に拡散する傾向をみせる。出土する遺跡は寺刹・客舎などであり、墳墓や寺刹などの址で発見された事例によって、高麗青磁と組み合わせて使用されたものとみることができる。<sup>(26)</sup>たとえば、東海（日本海）の三陟三和里石室墓の場合、注子（水注）・蓋托などは高麗青磁、梅瓶は高麗白磁であり、中国青白磁は鉢と皿である。丹陽玄谷里の高麗時代の古墳においても、注子は高麗青磁であり、碗は高麗青磁とともに青白磁が発見されている（図18）。

このような輸入白磁の性格と意味について考えると、北宋代の白磁は高麗の使臣が中国への往來の際に購入したり受贈したりしたものである可能性がある。南宋代～元代の白磁は大量生産された輸出品（鉢・皿類）に限定されており、貿易陶磁の活発な流通による高麗への流入とみることができるのだが、これには宋と高麗との貿易を主導した宋商の旺盛な貿易活動が大きく作用したとみられる。実際に『高麗史』の記録によると、宋商は11世紀初めの顯宗代から13世紀後半の忠烈王代初めに至るまで、およそ260年間に135回にわたって、7,000人を越える膨大な人員が高麗を訪れたことで知られ



図18 丹陽玄谷里古墳内の高麗青磁と中国白磁の共伴出土状況

(27)  
る。

高麗中期の輸入中国白磁は、主に高麗白磁の代替品として消費され、出土遺跡の事例に鑑みると、上流層の専有物であった可能性が高い。開城が最大の消費地であり、上流層の居住地域での出土品が最も品質が良い。開城以外でも全国的に出土する中国白磁は、地方の大型の寺刹や古墳で出土する機会が多いのだが、僧侶や地方郷吏層のような二次的な土豪勢力や特殊身分階層が主要な消費集団であり、彼らの富や能力を誇示するための手段と認識され、使用されていたとみられる。そして、これは当時の高麗内部における白磁に対する消費欲求が高かったのに対して、質的に優れた白磁を製作するのが難しい環境であったため、比較的容易に得られる中国白磁がおのずと大量輸入されたと考えられる<sup>(28)</sup>。

表1 高麗時代の遺跡における中国白磁の出土状況一覽<sup>(31)</sup>

地域(行政区域)	遺蹟名	北宋～金代	南宋～元代	備考
北韓	高麗宮城(満月台) <sup>(29)</sup>	白磁碗(北宋 推定/1), 白磁皿片(北宋 推定/1), 白磁花形皿(1), 青白磁陰刻皿(1)	青白磁皿(景德鎮窯/1), 白磁蓮弁文碗(1), 青白磁碗(景德鎮窯/1), 白磁碗片(1)	白磁皿(時代未詳/1)
北韓	黄海北道開城 <sup>(30)</sup>	定窯: 大皿(7), 皿(9), 碗(1), 鉢(1), 小壺(2), 筒形蓋(2) 景德鎮窯: 大皿(1), 鉢(3), 皿(4), 碗(6), 盒(11), 蓋托(1), 注子(10), 承盤(1), 枕(1), 瓜形瓶(2), 小壺(1)	青白磁皿(景德鎮窯/2)	
北韓	慈江道熙川西門洞遺蹟		鉢(2), 青白磁皿(2), 盒(1)	
北韓	黄海南道龍媒島	瓜形瓶北宋または南宋/1)		
北韓	黄海南道開豊(伝)文公裕墓	青白磁小注子(1), 青白磁鳳首瓶(1)		
江原	東海(三陟)三和洞古墳	碗(定窯/3), 白磁皿(5)	青白磁鉢(2)	
江原	原州法泉寺址	白磁花形皿(1)	青白磁皿(景德鎮窯/6), 青白磁碗(1)	
江原	原州居頓寺址	白磁皿(1), 白磁盒(推定/1)		
江原	江陵堀山寺址	白磁片(1)	青白磁皿(景德鎮窯/1)	
仁川	江華島新鳳里, 長井里遺蹟	白磁皿(2)		
仁川	江華玉林里遺蹟(江華中城)		青白磁碗(景德鎮窯/1)	
京畿	坡州惠蔭院址	皿(2), 蓋(2)	白磁碗(2), 青白磁碗(3), 青白磁皿(景德鎮窯/4)	

地域(行政区域)	遺蹟名	北宋～金代	南宋～元代	備考
京畿	驪州元香寺址	白磁片(北宋 推定/1)	青白磁皿(景德鎮窯/2)	
京畿	驪州高達寺址	白磁花形皿(1)	青白磁皿(1), 白磁大椀(福建または広東産/1)	
京畿	安城奉業寺址	白磁碗(広東産/1), 白磁片(北宋～南宋 推定/11), 白磁花形皿片(2)	青白磁皿(景德鎮窯/1)	
京畿	龍仁麻北里寺址		青白磁皿(景德鎮窯/1)	
京畿	龍仁古墳(新葛-水高速道路公司建設区間)		青白磁皿(景德鎮窯/5)	
京畿	華城花山洞遺蹟		青白磁皿(景德鎮窯/1)	
京畿	安山大阜島六谷古墳群	白磁碗(定窯系 推定/4)		
忠清	大田加午洞遺蹟-古墳	白磁碗(福建/1)		
忠清	丹陽玄谷里古墳群		白磁碗(1), 白磁碗(北宋～南宋, 福建または広東/1)	
忠清	扶餘王興寺址	白磁花形皿(1), 白磁皿(2), 白磁碗(1)		
忠清	瑞山普願寺址	白磁片(広東 推定/1)		
忠清	泰安馬島海底	白磁碗(福建/67), 白磁皿(8), 白磁碗(広東/3), 青白磁碗(景德鎮窯/2)	青白磁皿(景德鎮窯/1), 白磁碗(福建/13), 白磁皿(福建/1), 青白磁皿(3), 壺(福建/2)	
忠清	保寧聖住寺址	白磁皿(1), 白磁片(北宋 推定/2)	青白磁碗(1)	
全羅	益山弥勒寺址	白磁碗(定窯系/4), 白磁碗(広東または福建/2), 白磁皿(北宋～金代/2), 白磁皿(1), 白磁花形皿(4)	青白磁皿(景德鎮窯/1)	
全羅	南原実相寺址	白磁皿(推定/4), 白磁碗(1)	青白磁皿(景德鎮窯/1)	
全羅	羅州松月洞遺蹟址		青白磁花形碗(2)	
全羅	扶安竹幕洞遺蹟	白磁陰刻花文大椀(2)		
全羅	群山仙遊島近海		青白磁盒(1)	
全羅	新安黒山島海底		青白磁盒(身/1), 青白磁皿(1)	

地域(行政区域)	遺蹟名	北宋～金代	南宋～元代	備考
慶尚	慶州王京遺蹟地区	白磁碗(2), 象形白磁片(北宋または南宋/1)		
慶尚	慶州仏国寺境内遺蹟	白磁花形皿(3), 白磁皿(2), 白磁碗(3)	青白磁皿(景德鎮窯/6), 青白磁碗(5)	時代未詳 白磁皿1, 碗1/時代未詳 白磁底部片1, 盒片1, 器種不明 白磁片1
慶尚	尚州西谷洞		青白磁銀鈎大楪(4)	
済州	缸坡頭里城		青白磁盒蓋(1), 青白磁盒片(2), 青白磁壺南宋 推定/1, 青白磁瓶片(2), 青白磁皿(6)	時代未詳 白磁片(1), 白磁大楪(1)
済州	水精寺址	北宋 青白磁花形皿(1)		
済州	法華寺址	白磁皿(1, 定窯 推定)	青白磁鉢(景德鎮窯/1)	
済州	新倉里海底		青白磁注子片(推定/1)	
済州	高内里遺蹟(生活遺蹟 推定)		青白磁梅瓶(景德鎮窯/1), 青白磁皿(福建/1)	
済州	一徒1洞(関防施設 推定)		白磁大楪片(福建/1)	

## 2. 中国青磁の出土の様相

中国青磁の場合、越州窯産はおおよそ五代～北宋代のもので、一部地域では少量が確認される。北宋代の耀州窯青磁が開城一帯と寺址で確認され、高麗陶磁の造形にもやはり影響を与えた。龍泉窯青磁の場合、一部の陸上遺跡(韓半島本土の遺跡)と海底から出土するが、仏塔の舍利器として発見されるものを除けば、高麗時代の一般的な遺跡では確認されない。しかし、高麗青磁の器型・模様素材などにおいて、元代陶磁の影響が確認されている。これは当時の高麗と元との陶磁貿易が政治外交的な状況と関連があるものとみられる。文献に現れた対元交流は、人的・物的・制度的な部分で多様に展開されていたといえるが、物的交流は事実上収奪に近い要求が中心である。龍泉窯青磁をはじめとする元代陶磁器が開城を除き、高麗時代の一般的な遺跡でほとんど発見されないことについては、高麗が主導的に陶磁貿易を活性化できないという状況、および高麗青磁の量的・質的水準がすでに充分であるという状況によるものとする見解がある<sup>(32)</sup>。特に当時の高麗はすでに多様な技法を通して質的に優れた青磁を製作できていたのだが、象嵌青磁をはじめとする質的に優れた高麗青磁の相当量が中国に輸入されたことは、中国寧波・杭州などの南宋代のさまざまな遺跡における、最近の高麗青磁の出土事例によっても立証される。したがって、このような高麗の窯業の状況を反映し、中国青磁の需要が中国白磁に比べて低かったものと推測される。

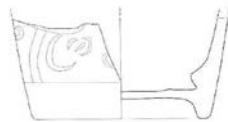


### 3. 濟州地域中国陶磁器の出土の様相

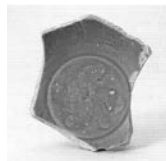
濟州の高麗時代の遺跡では、陸上遺跡とは多少異なる中国陶磁器の出土の様相が確認される。濟州において中国陶磁器が発見されたところは、寺刹・官衙址・城郭遺跡・祭祀遺跡・生活遺跡などで、中国陶磁器のなかでも龍泉窯青磁がもっとも多く、その次に景德鎮窯青白磁が多い(図19)。これ以外にも、越州窯青磁・定窯白磁・福建同安窯青白磁、江蘇宜興窯・河北磁州窯の褐釉瓶などが<sup>(33)</sup>発見された。

先述したように、高麗時代の陸上遺跡において、中国青磁は初期～中期越州窯と耀州窯系の青磁が主体をなしており、高麗中期の遺跡では定窯と景德鎮窯の白磁が主流となる。これに対して、龍泉窯青磁はほとんど発見されていない。濟州の寺刹・官衙址・海域などでは、多数の出土例が報告されるのだが、それは龍泉窯青磁瓶や、内底面に陰刻や陽刻で花文を施文した鉢片、外面に陽刻で蓮弁文を装飾した鉢などである。<sup>(34)</sup>一方、濟州の新倉里海底で発見された有耳の黒褐釉陶器瓶は、元代陶器瓶の典型的な形態で、飲食物の貯蔵・運搬用として知られる(図20)。これらの陶器瓶は、中国元の軍隊が濟州海域を経由して九州の海域へ移動した経路上で発見されたとする見解もある。

こうした濟州島への中国陶磁器の流入に関しては多くの見解がある。濟州人が開城へ上って市場や八関会などの集まりに加わり、中国商人との交流をとおして入手した場合、中国南方で龍泉窯青磁や福建省地域の陶磁器を積んで日本へ向かった貿易船が途中で濟州を経た場合、<sup>(35)</sup>濟州島が中国と



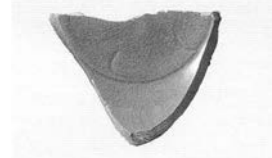
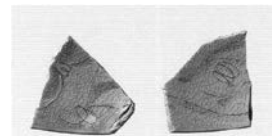
1. 青白磁梅瓶片, 濟州高内里(国立濟州博物館所蔵)



2. 青磁陰刻牡丹文大椀(碗), 濟州新倉里(国立光州博物館所蔵)



3. 青磁陽刻蓮弁文「吉」銘大椀(碗)(濟州東南近海)(国立公州博物館所蔵)



5. 青磁陰刻草花文大椀(碗)片, 濟州水精寺址(濟州大学校博物館所蔵)



4. 青磁陰刻牡丹蓮弁文双層碗(濟州東南近海)(国立公州博物館所蔵)

図19 濟州地域出土の龍泉窯青磁と景德鎮窯青白磁梅瓶片

日本をつなぐ中継拠点地としての役割を担い、中国から日本へ行く正式の航海ルート（福州→寧波→濟州→日本博多、または琉球諸島→九州）によって流入した場合である<sup>(36)</sup>。しかし、濟州島は周辺が崖の海岸線、あるいは溶岩の暗礁からなっていて、船が停泊するには無理があるとい<sup>(37)</sup>う。特に10～14世紀前半の宋日・元日貿易において、高麗の西南海島嶼地域が史料にときどき登場することもあるが、危険な海難場所と認識される一方、南西海岸の南方にうかぶ濟州（耽羅）は、中日交通において航海の標識でもあったとい<sup>(38)</sup>う。また、宋日・元日間交通は、14世紀前半までおおそ博多—明州（寧波）をつなぐ東中国海（東シナ海）直航路によって成り立ったとする見解<sup>(39)</sup>なども参考にすると、濟州島を正式の中日貿易ルート上の中間寄港地とみるのは難しいと考える。



図20 濟州新倉里海底出土の黒褐釉土器瓶（国立濟州博物館所蔵）

#### 4. 泰安馬島海底出水の中国陶磁器

高麗時代の西・南海岸においては、福建や広東産の磁器、浙江省龍泉窯青磁など、高麗時代の韓国の一般的な陸上遺跡ではやや珍しい中国陶磁器が出土することもある。2009～2010年、忠清南道泰安郡馬島海域（Ⅱ地区）において、船は発見されなかったものの、中国式の碇石とともに大量の中国陶磁器が発見された<sup>(40)</sup>（図21）。中国陶磁器は計166点であり、内訳は白磁97点、青磁15点、白釉3点、黄釉2点、黒釉24点、褐釉1点、陶器21点、青面白磁3点である<sup>(41)</sup>。陶磁器のなかで白磁の数量が非常に多く、器種は鉢、皿、碗、大盤、壺、瓶がある。陶磁器の大部分は高台と底部に釉葉が施されておらず、面取りをしたり、高台を削ったりした、粗悪なものである。釉葉は塊になったり、流れたりして、焼成状態は良くなく、油面の傷跡もはっきりしている。特に馬島海域の中国陶磁器は、日本の九州・博多遺跡群で大量に出土した中国陶磁器と非常に類似した様相を帯びたものであることが確認されている。この中国陶磁器は、おおそ11世紀後半～13世紀後半に編年される宋代陶磁器が中心である。陶磁器の生産地は、福建省・広東省・江西省・浙江省一帯と推定され、なかでも福建産のものが非常に多い。広東潮州窯、福建閩青義窯、南平茶洋窯、連江窯（浦口窯）、建窯、磁竈窯、東張窯、東安窯（系）、浙江龍泉窯系、江西景德鎮湖田窯などの窯場で生産さ



1. 様々な中国陶磁器



2. 墨書銘のある中国陶磁器

図21 泰安馬島海域（Ⅱ地区）出水中国陶磁器（国立海洋文化財研究所提供）

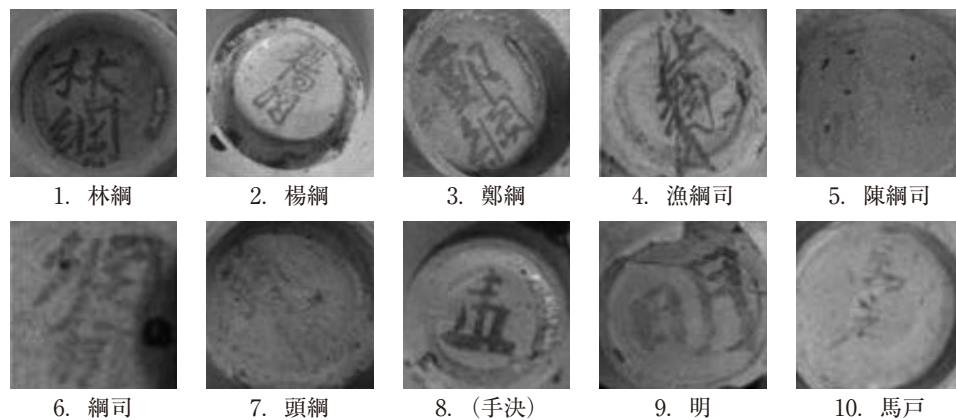


図 22 泰安馬島海域（Ⅱ地区）出水中国陶磁器の墨書銘の種類

れたものである。<sup>(42)</sup>

特徴的なのは 82 点（約 50%）の陶磁器の高台の内底面に墨書で銘が記載されているということである。銘は何種類かの類型に区分されるが、姓 + 網司，姓 + 網，姓 + 花押，姓，網，手決（花押）がある（図 22）。このように墨書銘が記載される中国陶磁器のなかでも代表的なのは、元・日間の貿易船であった新安船の出水品であり、日本では九州の福岡県博多遺跡群の出土品を挙げることができる。中国と東南アジア地域では、だいたい難破船と海域から発掘されているが、墨書銘陶磁器の大部分は宋・元代の中国南方地域で製作されたものであり、貿易品と推定される陶磁器とともに出土した。実際に「網」は、中国で対外貿易を営んでいた商人集団のことで、そのリーダーを「網首」「都網」などと称した。『高麗史』に「泉州商都網林藹」「都網陳守」「網首楊紹」らの記録があり、中国の『諸蕃志』『宋史』には「船主都網」「網首蔡景芳」らの記録がある。このような様相を総合してみると、馬島海域出水の中国陶磁器は、当時、東南アジア・高麗・日本との間を往来していた宋代の商人たちの貿易活動との関連性が高いと考えられる。<sup>(44)</sup>

ただし、こうした陶磁器が馬島海域で出土することについて、高麗と宋との間を往来した宋商人の活動によるものとする見解、博多に居住して中国と交流していた宋商人が高麗を経由して日本に来る途中で残していった遺物とする見解がある。<sup>(45)</sup> 宋と日本との貿易を示すものとする主張については、馬島海域で出水した中国陶磁器が福建省で生産されたものが主流であり、このような陶磁器は韓国内の陸上遺跡からはほとんど出土しないという点が根拠となっている。また、九州の博多遺跡群で出土した中国陶磁器と非常に類似する点も指摘されている。これについて筆者は、『宋史』列伝<sup>(46)</sup>などの当時の史料のなかに、福建人を中心とする宋商人たちの高麗流入が確認されるという点、そして数量が非常に少ないながらも、開城一帯と寺利・墳墓などの遺跡で福建・広東産の陶磁器が発見されているという点に鑑みると、宋・高麗間の貿易の過程で沈水したものが発見されたとみることができる。<sup>(47)</sup> しかし、馬島海域出水の中国陶磁器の時期幅が広いと、数回にわたる貿易船の来航があったのだろう。したがって、馬島海域での発見品だけで、当時の海上貿易ネットワークを断定的に論じることはできない。今後、詳細な調査が行われるならば、こうした問題の解決にもう一歩近づけることができるだろう。

## ④……………結論

高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器の種類・生産地・時期別の流入の様相、および共伴して出土した中国陶磁器の特徴について考察してみた。整理すると、最大の特徴は、白磁がもっとも量的にも多く、質的に優れた輸入陶磁器だったことである。これに比べると、龍泉窯青磁は高麗時代の陸上遺跡（韓半島本土の遺跡）では確認される数量が非常に少なく、特異なことに済州地域ではさまざまな遺跡で確認されるという点である。当時、優れた高麗青磁を保有していた高麗において、中国から輸入する青磁は白磁に比べて選好度が低かったこともわかった。

済州地域においては、高麗時代の陸上遺跡で発見される黒釉碗が発見されておらず、さまざまな陸上遺跡で発見され数量が多い景德鎮窯の折腰形青白磁皿もほとんど確認されていない。これに比べて、龍泉窯青磁の出土量がより多く、さまざまな場所で発見されるという点は、高麗時代の陸上遺跡とは確かに異なる中国陶磁器の分布状況をあらわしている。したがって、中国陶磁器は済州地域にどのような経路で流入したのか、同じ寺刹遺跡であっても、高麗時代の陸上遺跡と済州地域の遺跡とでは陶磁器構成が異なる理由は何であるのかを考察する必要がある、これによって当時の東アジアにおける中国陶磁器の流通に済州島がどのような意味をもっていたのかを、少しでも把握することができるだろう。

また、泰安馬島海域で大量に発見された中国陶磁器と関連して、宋・元と日本との間の貿易に関わる出土品であるのか、宋・元と高麗との間の貿易に関わる出土品であるのか、さまざまな意見がある。これに関しては、2018年に国立海洋文化財研究所が新安黒山島（大屯島）海域で大量の中国陶磁器を発掘したことが参考となる<sup>(48)</sup>。新安黒山島海域では、55点の陶磁器のうち、南宋代龍泉窯の青磁鉢・皿が多く、そのほか福建省の黒釉碗と白磁鉢・皿などがある。発見された中国陶磁器は、おおよそ12世紀中後半～13世紀前半の南宋代の龍泉窯青磁が主流をなしている。新安黒山島海域は、宋から高麗に向かうときに利用された航路上に位置している。馬島や黒山島などの海域から中国陶磁器が出水したのは、宋・日本間の貿易における中間寄港地であったためなのか、それとも宋・高麗間の貿易ルート上に位置したためなのかは、今後の調査成果が蓄積されれば、より綿密に検討することができるだろう。

また、高麗時代の遺跡から出土する中国陶磁器のなかでも、福建や広東産などの南方系白磁は、従来は南方系という程度でしか窯場が分類されておらず、より詳細な生産地は把握されない傾向がある。しかし、最近の研究成果によって、窯場の詳細が明らかになりつつある。このように、福建・広東産などの比較的粗質な白磁の出土事例は、定窯・景德鎮窯白磁とどのような関係にあり、組み合わせをなしているのか、詳細な分析が必要だと考える。付け加えて、高麗時代の遺跡で発見される中国黒釉碗は、ほんの一部の寺刹と墳墓で発見されるもので、すべての寺刹や墳墓で発見されていない。当時、高麗陶磁ないしは中国白磁との組み合わせに、どのような意味があったのか、気がかりな点がある。このような内容に関しては、今後の課題として、ここで文を締めくくりたい。

## 註

- (1)——国立海洋文化財研究所・学芸研究士。
- (2)——高麗時代陶磁の時期区分については、研究者によって意見が異なる。しかし、概ね高麗中期を12～13世紀とすることには、大部分が同意している。より細かいえば、元の干渉が本格化した1270年代以降を高麗後期または末期の始まりとする見解が多い。姜敬淑『韓国陶磁史』（芸耕，2012年），金允貞『高麗末朝鮮初銘文青瓷研究』（高麗大学校大学院文化財学協同課程美術史学専攻博士学位論文，2011年），李鍾玖「高麗後期対元陶磁交流の類型と性格」（『震檀学報』114号，震檀学会，2012年），張南原『高麗中期青瓷研究』（ヘアン，2006年）参照。
- (3)——国立大邱博物館『私たちの文化のなかの中国陶磁器』（2004年）185頁の分布図を使用し、筆者が一部の窯址を追加したことを明記しておく。
- (4)——浙江省上虞・余姚・寧波を中心として紹興・奉化・鄞県・黄岩などに至る越州地域に分布する窯を称する。このうち上虞県の窯と上林湖一带に分布する余姚県の窯，慈溪県の窯は，唐・五代・宋初に至るまで大規模に青磁を生産した窯場である。特にこの地域の窯は，晩唐代から王室に青磁を捧げたことで有名である。金英媛「国立中央博物館所蔵中国陶磁の内容と性格」（『国立中央博物館所蔵中国陶磁』，国立中央博物館，2008年）356頁参照。
- (5)——前掲『私たちの文化のなかの中国陶磁器』。
- (6)——前掲『国立中央博物館所蔵中国陶磁』。
- (7)——姜敬淑「高麗前期陶磁の対中交渉」（『高麗美術の対外交渉』エギョン，2004年）226～227頁。
- (8)——李喜寛「慶州地域出土越窯青瓷」（『韓国古代史探求』15，韓国古代史探求学会，2013年）181～189頁。
- (9)——任真娥「高麗青磁に見える北宋・遼代磁器の影響」（弘益大学校大学院修士学位論文，2005年）58頁。
- (10)——崔明知「泰安大島海底出水高麗青磁の様相と製作時期の研究」（『美術史学研究』第279・280号，韓国美術史学会，2013年）53～54頁。
- (11)——釜山博物館『土をこねて玉をつくる 龍泉青磁』（2011年）。
- (12)——水鐘寺舍利塔は，朝鮮時代の世宗21年（1439）に王室の発願により，太宗李芳遠（1367～1422）の娘「貞恵翁主」（？～1424）を追慕するために製作されたものと確認されている（<http://www.heritage.go.kr/heri/cul>）。
- (13)——シンジュン「韓半島発見龍泉窯磁器の現況と意義」（『済州学研究』34・「東アジア海上貿易路から済州島の位相に関する実証的研究—済州新倉里海底遺跡中国陶磁と同時期の日本の中国陶磁器受容様相の比較を中心として」，済州発展研究院済州学研究センター，2016年）132頁。
- (14)——金英媛「新安船の磁器と高麗遺跡出土元代磁器」（『美術資料』第90号，国立中央博物館，2016年）80頁。
- (15)——仁川中山洞遺跡は，調査の結果，新石器時代から朝鮮近世まで多様な時期にわたる研究が確認される。遺跡からは約350余点に達する高麗青磁，朝鮮白磁，高麗～朝鮮時代の土器と共伴して中国磁器も2点出土した。そのうち1基の高麗時代の石廓墓から，高麗青磁碗・瓶と共伴して中国製と推定される青磁鉢が発見された。中央文化財研究院『仁川経済自由区域永宗地区永宗ハヌル都市内（3区域）仁川中山洞遺跡—本文2—』（2011年）2～4頁参照。
- (16)——金允貞「高麗後期象嵌青磁にみえる元代磁器の様相」（『美術史学研究』第249号，韓国美術史学会，2006年）。
- (17)——前掲任真娥「高麗青磁にみえる北宋・遼代磁器の影響」。
- (18)——金允貞「高麗時代遺跡出土宋代青白瓷の現況と特徴」（『野外考古学』第16号，韓国文化財調査研究機関協会，2013年）92～103頁，李鍾玖「高麗中期輸入中国白磁の系統と性格」（『美術史研究』25，美術史研究会，2011年）151頁。
- (19)——前掲金允貞論文（2013年）94頁・102頁。
- (20)——前掲『国立中央博物館所蔵中国陶磁』。
- (21)——白磁陽刻蓮弁文有蓋筒形蓋は，既存の報告資料では宋代の遺物とみなされているが，最近の研究成果などをとおしてみると，金代の定窯で製作されたものと推定される。金允貞「高麗12世紀青磁有蓋筒形蓋の造形的特徴と製作様相」（『海洋文化財』第2号，国立海洋文化財研究所，2009年）132頁。
- (22)——尹恩珠『宋金時期東亜出土的中国白瓷研究』（復旦大学修士学位論文，2016年）26頁。
- (23)——前掲金英媛論文（2008年）375～376頁。
- (24)——前掲金允貞「韓国出土磁州窯系磁器の現況と意味」70頁。
- (25)——前掲金允貞論文（2019年）82頁。
- (26)——前掲金允貞論文（2013年）114頁。

(27)——1107年頃から1279年までは5～30年の空白が何度かあり、武臣政権期における宋商の活動が記録に残ることは非常に少ないが、実際には旺盛に活動していたものとみられる。朴玉杰「高麗来港宋商人と麗宋の貿易政策」(『大東文化研究』32, 成均館大学校東アジア学術院, 1997年) 36～42頁。

(28)——前掲李鍾玖論文(2011年) 154頁。

(29)——高麗宮城(開城満月台)については、2007年から2018年まで計8次にわたる調査が実施された。2014年に実施された6次調査までの発掘調査報告書が発刊されているので(国立文化財研究所『開城高麗宮城』(2009年), 同『開城高麗宮城南北共同発掘調査報告書』I・II(2012年, 2015年)), それをもとに数量と器種を抽出した。

(30)——開城出土陶磁器については、国立中央博物館の所蔵品を対象とし、前掲『国立中央博物館所蔵中国陶磁』を参照して抽出した。

(31)——出土状況一覧の作成にあたっては、基本的に以下の論文を参照したが、論文で確認できない場合は、該当する遺跡の発掘調査報告書を参照した。前掲尹恩珠論文, 前掲金允貞論文(2013年), 前掲任眞娥論文。

(32)——前掲李鍾玖論文(2012年) 315頁。

(33)——前掲キムヨンミ論文(2013年) 174頁。

(34)——もちろん、これ以外にも済州新倉里海底などの海域で発見された「河濱遺範」銘の青磁鉢・青磁陰刻牡丹文鉢・青磁双層碗などもあるが、実際に消費された遺跡に限って説明することにする。

(35)——前掲キムヨンミ論文(2013年) 179～180頁。

(36)——三達也ほか『済州学緑区34・東アジア海上貿易路における済州島の位相に関する実証的研究—済州新倉里海底遺跡中国陶磁器と同時期の日本の中国陶磁器受容の様相の比較を中心として—』(済州発展研究院済州学研究センター, 2016年) 186頁。

(37)——藤田明良・李善愛・河原典史「島嶼から見た朝鮮半島と他地域の交流—済州島を中心に」(『青丘学術論

集』第19集, 韓国文化研究振興財団, 2001年) 8頁・22頁, 鄭銀珍「済州島出土陶磁器—高麗時代を中心へとして」(『李秉昌博士記念韓国陶磁研究報告』9・東アジア海域と高麗青磁II, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2016年) 99～100頁。

(38)——榎本渉「宋日間海上航路と高麗島嶼地域」(『海洋文化財』第9号, 国立海洋文化財研究所, 2016年) 90～96頁。森平雅彦「青磁がわたった海の道」(『李秉昌博士記念韓国陶磁研究報告IV』, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2010年) 24頁。

(39)——前掲榎本渉論文 76～79頁。

(40)——国立海洋文化財研究所『泰安馬島海域探査報告書』(2011年) 39頁。

(41)——国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』(2013年) 160頁。

(42)——栗建安「韓国馬島II区域海底出水中国福建陶磁と陶磁交易」(『2011年国立海洋文化財研究所国際学術シンポジウム 高麗の難破船と文化史』国立海洋文化財研究所, 2011年) 184頁。

(43)——林敬熙「馬島海域発掘墨書銘陶磁器の歴史的性格」(国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』2013年) 168～170頁。

(44)——李明玉「泰安馬島II地区海底出土中国陶磁研究」(忠北大学校大学院考古美術史学科碩士学位論文, 2013年) 111頁。

(45)——田中克子「韓国の泰安馬島海域で出土した中国陶磁器からみた東アジア海域海上貿易の様相—博多遺跡群で出土した中国陶磁器との比較を通して—」(国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』2013年)。

(46)——『宋史』卷487・列伝246・外国3・高麗国条に「高麗王城に華人数百名がいるが、多くの人々は閩人で、商船に乗ってきた者たちである」とある。

(47)——前掲李明玉論文, 前掲林敬熙論文。

(48)——国立海洋文化財研究所2018年12月5日報道資料「国立海洋文化財研究所, 南宋代陶磁器500余点発掘」。

## 参考文献

### 1. 単行本

姜敬淑ほか『高麗美術の対外交渉』(エギョン, 2004年)

姜敬淑『韓国陶磁史』(芸耕, 2012年)

張南原『高麗中期青瓷研究』(ヘアン, 2006年)

韓盛旭ほか『高麗陶瓷新論』(学研文化社, 2009)

### 2. 論文

キムヨンミ「済州寺址出土高麗時代陶磁器考察」(『済州出土の高麗時代陶磁器』国立済州博物館, 2013年)

- 金英媛「国立中央博物館所蔵中国陶磁の内容と性格」(『国立中央博物館所蔵中国陶磁』国立中央博物館, 2008年)
- 金英媛「新安船の磁器と高麗遺跡出土の元代磁器」(『美術資料』第90号, 国立中央博物館, 2016年)
- 金允貞「高麗後期象嵌青磁にみえる元代磁器の影響」(『美術史学研究』第249号, 韓国美術史学会, 2006年)
- 金允貞「高麗12世紀青磁有蓋筒形蓋の造形的特徴と製作様相」(『海洋文化財』第2号, 国立海洋文化財研究所, 2009年)
- 金允貞『高麗末朝鮮初銘文青瓷研究』(高麗大学校大学院文化財学協同課程美術史学専攻博士学位論文, 2011年)
- 金允貞「高麗時代遺跡出土宋代青白瓷の現況と特徴」(『野外考古学』第16号, 韓国文化財調査研究機関協会, 2013年)
- 金允貞「韓国出土磁州窯系磁器の現況と意味」(『国立光州博物館国際学術大会 韓・中・日粉粧磁器の現況と性格』, 国立光州博物館, 2019年)
- 栗建安「韓国馬島Ⅱ区域海底出水中国福建陶磁と陶磁交易」(『2011年国立海洋文化財研究所国際学術シンポジウム 高麗の難破船と文化史』国立海洋文化財研究所, 2011年)
- 朴玉杰「高麗来港宋商人と麗宋の貿易政策」(『大東文化研究』32, 成均館大学校東アジア学術院, 1997年)
- シンジュン「韓半島発見龍泉窯磁器の現況と意義」(『済州学研究』34・「東アジア海上貿易路から済州島の位相に関する実証的研究—済州新倉里海底遺跡中国陶磁と同時期の日本の中国陶磁器受容様相の比較を中心として」, 済州発展研究院済州学研究センター, 2016年)
- 尹恩珠『宋金時期東亜出土の中国白瓷研究』(復旦大学碩士学位論文, 2016年)
- 林敬熙「馬島海域発掘墨書銘陶磁器の歴史的な性格」(国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』2013年)
- 李明玉『泰安馬島Ⅱ地区海底出水中国陶磁研究』(忠北大学校大学院考古美術史学科碩士学位論文, 2013年)
- 李鍾攻「高麗中期輸入中国白磁の系統と性格」(『美術史研究』25, 美術史研究会, 2011年)
- 李鍾攻「高麗後期対元陶磁交流の類型と性格」(『震檀学報』114号, 震檀学会, 2012年)
- 李喜寛「慶州地域出土越窯青瓷」(『韓国古代史探求』15, 韓国古代史探求学会, 2013年)
- 任真娥『高麗青磁にみえる北宋・遼代磁器の影響』(弘益大学校大学院修士学位論文, 2005年)
- 鄭銀珍「済州島出土陶磁器—高麗時代を中心へとして」(『李秉昌博士記念韓国陶磁研究報告』9・東アジア海域と高麗青磁Ⅱ, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2016年)
- 三達也ほか「済州学縁区34・東アジア海上貿易路における済州島の位相に関する実証的研究—済州新倉里海底遺跡中国陶磁器と同時期の日本の中国陶磁器受容の様相の比較を中心として—」(済州発展研究院済州学研究センター, 2016年)
- 田中克子「韓国の泰安馬島海域で出土した中国陶磁からみた東アジア海域海上貿易の様相—博多遺跡群で出土した中国陶磁器との比較を通して—」(国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』2013年)
- 森平雅彦「青磁がわたった海の道」(『李秉昌博士記念韓国陶磁研究報告Ⅳ』, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2010年)
- 藤田明良・李善愛・河原典史「島嶼から見た朝鮮半島と他地域の交流—済州島を中心に」(『青丘学術論集』第19集, 韓国文化研究振興財団, 2001年)
- 榎本渉「宋日間海上航路と高麗島嶼地域」(『海洋文化財』第9号, 国立海洋文化財研究所, 2016年)
- 崔明知「泰安大島海底出水高麗青磁の様相と製作時期研究」(『美術史学研究』第279・280号, 韓国美術史学会, 2013年)
- ### 3. 報告書
- 慶州大学校博物館『慶州仏国寺境内聖宝博物館建立予定敷地発掘調査報告書』(2006年)
- 中央文化財研究院『仁川経済自由区域永宗地区永宗ハヌル都市内(3区域)仁川中山洞遺蹟—本文2—』(2011年)
- 国立文化財研究所『開城高麗宮城』(2009年)
- 国立文化財研究所『開城高麗宮城南北共同発掘調査報告書』Ⅰ(2012年)
- 国立文化財研究所『開城高麗宮城南北共同発掘調査報告書』Ⅱ(2015年)
- 国立海洋文化財研究所『泰安馬島海域探査報告書』(2011年)
- 国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』(2013年)
- ### 4. 図録
- 国立扶餘文化財研究所『王興寺—発掘中間報告Ⅰ』(2002年)
- 国立大邱博物館『私たちの文化のなかの中国陶磁器』(2004年)
- 国立中央博物館『国立中央博物館所蔵中国陶磁』(2008年)
- 国立海洋遺物展示館『新安船と東アジア陶磁交易』(2006年)
- ソウル市立大学校博物館『高麗人の永遠なる命, 丹陽玄谷里』(2009年)

---

釜山博物館『土をこねて玉をつくる 龍泉青磁』（2011年）

（韓国・国立海洋文化財研究所，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2020年1月27日受付，2020年7月9日審査終了）



---

## **The Conditions and Characteristics of Chinese Ceramics Excavated from Sites of the Goryeo Dynasty: A Study Focused on Archaeological Findings from South Korea**

LEE Myoung ok Translated: ARAKI Kazunori

The Goryeo Dynasty had constant trade with the Song, Liao, and Jin Dynasties in its early and middle periods and with the Yuan Empire in its late period. Against this backdrop, a variety of Chinese objects of each period were introduced to the Goryeo Dynasty. In particular, a great deal of Chinese ceramics were distributed throughout the territory of the Goryeo Dynasty. Although they had been imported throughout the Goryeo period, many were found in sites of the mid-Goryeo period. An analysis of the distribution and characteristics of these sites indicates that Chinese ceramics were excavated from the ruins of palaces and government buildings, temples (and their remains), the ruins of buildings, and tombs in Gyeonggi, Chungcheong, Jeolla, and Gyeongsang Provinces and the Jeju Region and from the bottom of the sea in the Jeolla and Chungcheong Regions. According to an analysis of types of ceramics, the discovered celadons were produced at the Yuezhou kilns and the Longquan kilns, ranging from Yuezhou ware dated to the end of the Five Dynasties period to the Northern Song period to porcelains dated to the Northern Song period to the Yuan period, though most of them were produced during the Song period. The white porcelains were mostly produced at the Ding kilns or the Jingdezhen kilns during the Northern and Southern Song periods, and a few were made at the Cizhou kilns and other kilns in Fujian and Guangdong. In particular, celadon and white wares produced at the Jingdezhen kilns from the 12th to 13th century account for most of the ceramics discovered from sites of the mid-Goryeo period across South Korea. In addition, black-glazed ceramics were excavated, including Jian wares, Jian series, Jizhou wares, Cizhou wares from Fujian, Cizao wares, and Jun wares. Moreover, the following paragraphs describe the characteristics of the Chinese ceramics excavated from terrestrial sites of the Goryeo Dynasty (within the Korean Peninsula).

First of all, most of the Chinese ceramics found in the Korean Peninsula were imported during the mid-Goryeo period. There were a few celadon wares, but most of the imported ceramics were white wares. Among them, there were a few lower-grade wares produced in Fujian and Guangdong, but the main imports of the Goryeo Dynasty were higher-quality white wares produced at the Ding kilns and the Jingdezhen kilns. Compared to the high demand for white ceramics in the Goryeo Dynasty at that time, the domestic supply of high-quality white wares was very limited. Therefore,

---

Chinese white wares were imported as substitutes for Goryeo white porcelains, owned and used by upper classes to demonstrate their wealth and power.

Secondly, Chinese celadon wares were found only in parts of South Korea, but the Goryeo Dynasty had produced high-quality celadon wares, including inlaid celadons, and exported them to China at that time, as indicated by recent archaeological excavations in Ningbo and Hangzhou. This situation of the Goryeo ceramic industry would account for the lower demand for celadons than for white wares in the Korean Peninsula.

Thirdly, in Jeju Island, Chinese wares were excavated from the ruins of temples, government buildings, fortresses, ritual sites, and livelihood sites. Most of the Chinese wares unearthed in the island were Longquan celadon wares, followed by Jingdezhen white wares. Archaeological excavations in the island also unearthed Yuezhou celadon wares, Ding white wares, bluish white wares produced at the Tongan kilns in Fujian, and brown-glazed bottles produced at the Yixing kilns in Jiangsu and at the Cizhou kilns in Hebei. In addition, some archaeological excavations in the island unearthed a number of white wares from Fujian, brown-glazed wares from Jiangsu and Hebei, and Longquan celadon wares from Zhejiang though they were rarely found in other terrestrial sites of the Goryeo period, which makes an interesting contrast between the island and the peninsula. Some studies assumed that this was because Jeju Island had served as a transit point for maritime trade between China and Japan, though further studies and a more detailed analysis are needed to confirm this assumption.

Fourthly, underwater archaeological excavations near Ma Island in Taean County and Heuksan Island in Sinan County unearthed Chinese ceramics rarely found in terrestrial archaeological sites in South Korea. There is an argument whether these underwater archaeological findings are attributed to trade between the Song Dynasty and Japan or trade between the Song Dynasty and the Goryeo Dynasty. Given the fact that ceramics made in South China have been found in terrestrial archaeological sites in South Korea, the author assumes that the Chinese ceramics retrieved from these underwater sites are products that were lost at sea while they were transported from Song China to Goryeo. Further studies are expected to elucidate details.

Key words: Goryeo period, Chinese ceramics, trade, Jingdezhen kilns, Ding kilns